

5. 教職実践センター活動報告

(1) 平成30年度教職実践センター主催シンポジウム

通常学級における特別支援教育
～子ども・保護者・教師 みんな笑顔になる～

1 本シンポジウムのテーマ

発達障がいなどがテレビや新聞などのマスコミに数多く取り上げられ、社会で注目されるようになった今日、特別支援教育についての理解も少しずつ進んできた。それにともない、特別支援教育を必要とする児童・生徒数も急激に増加している。特に通常学級における特別に配慮を要する児童生徒の増加が顕著になってきているが、特別支援学級に対する敷居はまだ高い。

その結果、担任の負担増、児童生徒を支援する職員の不足、家庭や地域の特別支援教育についての理解不足など、通常学級におけるさまざまな課題が浮き彫りになってきている。

今回のシンポジウムでは、事前に通常学級に焦点を当て、約100名の小中学校の学級担任、特別支援教育コーディネーター、特別支援教室担当者そして管理職にアンケートを取り現場の悩みを調査した。その結果を参考に、特別支援教育に長く携わってきた関係者、通常学級で実際に特別な配慮を要する児童生徒を支援している担任、さらに通常学級より通級し支援を受ける特別支援教室の支援員、そして組織的にそれらの問題を解決しようとしている学校長をシンポジストとして迎え、「通常学級における特別支援の課題と方策」について話し合い、児童生徒、教員、保護者の方々が少しでも安心して学校生活を送れるような、これからの特別支援教育の方向を探る。

2 シンポジスト

コーディネーター	日高 茂暢（作新学院大学人間文化学部 心理コミュニケーション学科 准教授）
シンポジスト	戸崎 克美（宇都宮市教育センター 学校生活適応支援アドバイザー）
シンポジスト	渡邊 功（宇都宮市立御幸が原小学校長）
シンポジスト	大川由香利（宇都宮市立泉が丘小学校教諭）
シンポジスト	河田有里子（宇都宮市立宮の原小学校 特別支援教室指導員）

3 シンポジウム タイトル

通常学級における特別支援教育

～子ども・保護者・教師 みんな笑顔になる～

4 開催日時と場所

2019年2月1日（金） 16：30～18：00 作新学院大学作新清原ホール

5 当日の進行 司会進行 木村直人（教職実践センター副センター長）

16:00 受付

16:30 開会

学長挨拶（代理） 玉城 要（カリキュラム委員会委員長 人間文化学部長）

16:40 シンポジスト紹介

日高茂暢

話題提供① 大川由香利先生

大規模校における通常学級担任・学年主任としての特別支援教育
ユニバーサルデザインを通して

話題提供② 河田有里子先生

小学校の特別支援教室における児童支援について
担任やかすたネットとの連携を通じたA君の支援について

話題提供③ 渡邊 功 先生

学校長としての特別支援教育の推進
組織としての対応と保護者との連携

話題提供④ 戸崎 克美先生

市教育センター 学校生活適応支援アドバイザーとしての実践
子ども，教師からみた学校生活に適応するということ
学校生活適応支援初回訪問から

指定討論・フロアディスカッション

日高茂暢

18:10 閉会

木村直人

6 後援

栃木県教育委員会 宇都宮市教育委員会 栃木県小学校長会 栃木県中学校長会

栃木県高等学校長会 栃木県PTA連合会 栃木県高等学校PTA連合会
宇都宮市PTA連合会 栃木県臨床心理士会

7 参加者	220名
栃木県内小，中，高等学校教員および教育委員会，一般	125名
作新学院大学 学生	75名
作新学院大学 教職員，学生ボランティア	20名

8 シンポジウムの概要とコメント

シンポジウムの前に，玉城作新学院大学人間文化学部長より，元来教育は一人一人を大切にしたい特別の支援が必要であるべきとの挨拶があった。続いて，日高コーディネーターより，今回のシンポジウムを通して「みんなで笑顔になれる関わり方を考えていくシンポジウムにしたい。」との抱負が述べられ，シンポジスト一人一人の紹介があった。

① 大川先生の話題提供

児童への正しい理解が適切な支援につながる。子どもの様子は変化するし，今の状況が本質とは限らない。さらに子どもは周囲の影響を受けやすい。理解しようと頑張っている途中の段階での支援として，手探りしながら配慮を要する児童へ対応している。

特別支援教育を意識した時，自分の授業の質を向上させることに課題を感じた。そこで，国語科を中心に教室のユニバーサルデザインの見直しとして，教材や環境の視覚化，年計の焦点化，用語の統一などの共有化を試みた。

それらの実践を通して現在も有効性を感じているものとして，教材を色分けし情報を分かりやすくしたり，掲示資料として学んだことを共有化したりさらには，文章のセンテンスを抜き出し焦点化を図るなどの工夫がある。また「何のために学ぶのか，そのために何をするのか」という見通しを持たせるゴールモデルの作成が有効である。

さらに，まちがったことの原因をみんなで見つけ言い合える学級，発達障がいの子が笑顔でいることがよい学級を心がけ，全体のソーシャルスキルを上げている。新しい教科書の中にも音節に注目させるなど特別支援教育に配慮した教材等があるので，教材研究に生かしてほしい。

また，大規模校の学年主任としては，小学校現場でのたくさんの教材研究を各担任のよさを生かしながら分担している。

② 河田先生の話題提供

通常学級より必要な時間に個別指導等を受けられる特別支援教室（宇都宮市の場合「かがやき」と呼ぶ）の支援員として，Aさんへの関わりと支援について発表する。

現在本校のかがやきは，さまざまな困り感をもった27名が利用している。

宇都宮市教育センター適応支援教室「かすたネット」と連携をしながら校内支援委員会や全職員からの協力も得て支援を行っている。

Aさんについては，こだわりが強い，自己表現苦手，衝動性が強い，ルールが身についていない，とてもデリケート等の行動面の持ちようがある。学習面においては，漢字，計算などの練習に家庭の協力を得ている。

かがやきでのAさんの支援方針として，まず，担任と一緒に，基本的な学習態度や困ったときのスキルなどの焦点化を行った。

具体的には，「いつまで，どこまで」という条件を視覚化したりスモールステップでめあてを見取り称賛したり，ロールプレイングなどで振り返り自分だけのルールにならないように心がけた。

例えば「かがやき」では，学習時に基本的学習態度のめあて「離れない，挙手する，SOSを出す」を共有する，遊びでは最後までルールを変えず，負けてもおこらないなどめあてに焦点を当てAさんの変容を認めるようにした。特別支援学級への通級も開始し，少しずつ成長している。

この実践から，少しの時間でも担任と情報交換する，担任以外の先生とも視点をそろえ状況を共有することが子供の成長に繋がると感じている。



③ 渡邊先生の話提供

通常学級における特別支援教育を実施する組織としての対応として研修の充実がある。発達障害に関する理解については，一人の教員が受けてきた研修を「にここ通信」を利用して，全教職員で共有してきた。

また，今までの教育に対する修正を行ってきた。学習指導に関する修正として，授業中の集中をそがないような教室環境のユニバーサルデザイン化や，学習活動の複線化などがある。

新学習指導要領対応のためには，学校の役割の修正，協働のための小集団の修正もある。

さらに，特別支援教育への対応としての役割分担がある。組織として役割を分担

し、担任の負担軽減を図ったり、学校外の支援ボランティアを導入したりまた、支援室をいろいろな場所に確保し、全職員がそれぞれの立場で支援できるようにした。

次に、保護者との連携、情報の共有である。特別支援教育についての共通理解を図るため、保護者への研修会や教育相談週間、スクールカウンセラーとの面談、特別支援だよりの発行などを行った。

情報共有では、保護者の思いを受け、長期、中期、短期目標を共有し、個人懇談などで達成状況を確認したり、目標、方法などの見直しをしたりさらには、学習の進め方なども支援方法を家庭と共有するなど、児童の多様性を共通理解し、教員、保護者の連携を深めてきた。

④ 戸崎先生の話題提供

宇都宮市教育センターにある学校生活適応支援室（かすたネット）のアドバイザーとしての学校訪問から気付いたことを報告する。

かすたネットとは、学校に出向いて、児童の学校生活への適応について支援するチーム。学校では適応に苦悩する子どもと先生がいる。個性、特性が環境とマッチしないための障がいであるが、その特性を学校の環境点検のポイントに生かすことで、学校の特別支援教育の充実を図ることができる。学校のユニバーサルデザインとは、多くの子にとって好ましい環境であるという意識が大切である。

訪問は、初回の観察・聞き取り、課題分析などから、支援計画や校内体制、かすたネットの支援などを話し合っていく。さらに児童への直接指導や保護者面談、関係諸機関との連携を図っていくのが一般的な流れになる。

初回訪問から感じるのは、児童と教員の思いのずれ、情報の行き違いが見られることである。観察や聞き取りから先生から見える子、子どもから見える環境など、両者の伝わり方のずれを見取り、子への届きやすい言葉掛けなどをアドバイスしている。ポイントは、先生が「何が、どこまでできるか 次は…」 「皆にとって 私にとってどうなのか」 「何が伝えたい、どう何が伝わったか」などを意識しながら子どもと関わっていくことである。

⑤ 日高より質疑

4人の話題からユニバーサルデザイン等の環境と障がいについて共通の話があった。環境に不適応ならそれをどう明確にしていくか、過ぎしやすい学校、学級作りには、学校生活で一番長い時間を過ごす授業において分かった、友達とうまく関わった、ということが大切。そのためにそれを支える先生が支援するための目標を立て焦点化したり保護者と共有したりしている。これを毎日、毎時間やるのはとても大変なこと。そのために学校の協力体制が必要になる。そこで、

- ・それぞれの先生が担任の分担としてこれだけは行いたいというものはあるか？
- ・また、シンポジウムの内容から担任としての工夫や校内の協力体制など、持ち帰ったものをスタートさせるときのアドバイスは？

＜戸崎＞身近な目標の持ち方として、「せめてこれだけはしてほしい」「子と共有できる言葉で」「認められるために目標はある」ということを意識したらよい。

＜渡邊＞「短期目標はできるだけ具体性を持たせる」「できたかできていないか 子どもも分かる目標にし、それを積み上げる」「校内にいろいろなオプションの役割分担を作っておく。」

＜河田＞「通常学級での授業の様子をヒントに、かがやきでは何ができるか」を担当と話し合う」

＜戸崎＞「リセットスペースの設置も有効」

⑥ フロアからの質問

＜フロア1＞

公立の小学校の方が特別支援教育に対応ができているのか？ また、かすたネットは、個人的に申し込めるのか？

＜戸崎＞公立は、いろいろな児童が入学しており、広範囲の児童に対応するため教員も特別支援教育に熱心である。かすたネットは市の組織であり、学校長からの要望に応じて対応している。個人的な相談には教育相談部が個別相談を行っている。



＜フロア2＞

特別支援コーディネーターとして、校内支援委員会などでのコミュニケーションの持ち方の工夫はあるか。

＜大川＞

学年会での共通理解やコーディネーターを通しての特別支援委員会、かすたネットからの助言を大切にしている。工夫としては、つまづいている子の困難について仮説を立て、そこから方策を考えるようにしている。

＜河田＞

小さなコミュニケーションの積み重ねが大切。担任との関係性(普段の様子の情報交換)を心がける、また本校では特別支援学級の先生が担任との間に立って動いてくれるので、そこから話を広げていくことができる。

⑦ コーディネーターのまとめ

通常学級での特別支援は、学校組織が一緒になり、教職員それぞれが持ち味を生かして考えを持ち寄るジグソーパズルを組み立てるような取組が大切だと言うことが今回のシンポジウムで明らかになった。

<コメント>

新学習指導要領解説では、各教科等の総説(1)改訂の経緯の中で、「その多様性を原動力とし、質的な豊かさを伴った個人と社会の成長につながる新たな価値を生み出していくことが期待される。こうした変化の一つとして、人工知能(AI)の飛躍的な進化を掲げることができる。」と社会構造の大きな変化を改訂の理由の一つとして挙げている。つまり、人間の力を補うためのコンピュータが発展し、記憶や作業スピード、規則や繰り返しなどを大切にしてきた今までの教育の大転換期であり、多様性を生かした新たな教育が求められているのである。

今回のシンポジウムで通常学級における特別支援教育の充実に向け各シンポジストの話題から出された、「共有」や「だれにでも優しい」というキーワードは、特別支援教育に限らず全学校・全児童生徒への教育の鍵になると感じた。

<シンポジウムに参加して>

早乙女 千夏（人間文化学部発達教育学科）

大川先生の話聞いて、発達障がいのある子が笑顔になるためには、他の子にとっても居心地の良いクラスを作ることが大切だと学びました。そのため、クラス全体が「わかる・できる」ようになるための工夫していることを知りました。

授業のユニバーサルデザインという言葉は以前にも聞いたことがありましたが、大川先生が具体的に実践している工夫を聞くことができました。その中で印象に残ったのは「焦点化する」という話でした。やることのレベルを下げるのではなく、やることを焦点化しスモールステップにすることで、先生も教えることが明確になり児童にも達成感が感じられると思います。学年の先生方がお互いに協力することで、少ない時間で授業の準備がよく出来るということは、大切だと思いました。

河田先生の話では、実際に自閉的な子にしてきた支援を聞くことができました。めあてをきちんと示し、ほめることが大切だと学びました。また印象的だったのは、児童が遊びのルールを守れるようになるための工夫です。児童に選択させたりわざと先生が良くないことをしてそれを児童に指摘させたりするやり方などはなるほどなど思いました。また担任の先生だけでなく、学校内のいろいろな先生と視点をそろえる情報の共有が大切だということ分かりました。

渡邊先生の話では、シンポジストのみなさんが話していた目標の立て方のポイントとして、長期・中期・短期の目標を立てること、また学校だけでなく家庭との情報の共有が大切だと言うことが分かりました。

戸崎先生の話では、学校生活適応支援相談員の活動について、聞くことが出来ました。初めて聞いた職業でしたが、学校の中だけで処理できない問題、またどうしたらいいか分からない教員にとって大切な存在だと思いました。さらに、発達障がいという考え方について、環境に上手く適応できない状態として捉えるという考え方もあるのだと気付くことが出来ました。

今回のシンポジウムに参加して、児童にも教員にも目に見える目標を立てることで、児童が達成感を持てるし教員からもほめられることから環境に適応できるようになること、また教員同士、家庭との協力することが児童にとって大切だと言うことを学びました。